

< 論文 >

東日本大震災後の大学生の価値意識をとらえる試み¹ — 定期的に調査の継続に向けて —

木野和代
大橋智樹
松浦光和

1. 問題と目的

東日本大震災²は、2011年3月11日に発生した三陸沖を震源とするM9.0の地震とこれに起因する津波、さらには原子力災害までを含む複合的な大規模災害であった。その被害状況や安否情報は、東日本大震災発災直後からメディアでは全国的に大きく報じられ、新聞・テレビでは特別枠が組まれるなどして、発災後一年ほどの間は東日本大震災関連の話題が報道されない日はないほどであった。死者・行方不明者のうちその大多数が含まれるなど直接的に大きな被害のあった岩手県・宮城県・福島県（以降、被災3県と表記する）の人々はもちろんのこと、日本中の人々もこうした情報に日々繰り返し接触することによって、大きな影響を受けたといえよう。

実際、東日本大震災直後から1週間にツイッターに投稿された日本語ツイートでは、災害への言及の有無やその種類に関係なく、ポジティブ感情よりもネガティブ感情、特に不安が急増し、持続的に多く出現していたことが示されている（三浦・小森・松村・前田，2015）。この研究は、三浦らも述べているように、当時ツイッターを利用できた人の反応を分析したものであり、つまり、直接的被災者というよりも、被災3県から離れて、各種メディアからの情報を得ていた対象者が多かった可能性が高い。このことから被災地から離れた地域の人々への心理的影響を示唆するものと考えられる。

そして、このような大きな災害に直接的・間接的に接して人々に生じた変化は、感情面のみにとどまらず、生活意識や価値観にも少なからず変化を与えたと考えられる。発生することを

¹ JSPS 科研費（課題番号 JP 15K11938; 研究代表者: 大橋智樹）の助成を受けた。

² 気象庁の定めた名称は「2011年東北地方太平洋沖地震」である。政府が閣議決定した「東日本大震災」の方が通称として一般的であることから、本論文においてはこの呼称を用いることとする。なお、著者らは東北地方太平洋岸における被害が甚大だったことを強調したい思いから、英語のタイトルなどにおいては「The Great Tohoku Earthquake」という呼称を用いたこともある。

あらかじめ予測することが困難な大災害の前後における価値意識の変化の測定をあらかじめ計画することは不可能であるが、東日本大震災以前の調査と同様の調査を実施することで、青少年の価値意識の変化を検討した研究はいくつか報告されている。たとえば浅野（2015）は、宮城県の中学生の「命の大切さに関する態度」を2010年度、2012年度、2013年度で比較し、全体に2012年度で高いことを示している。また、首都圏の大学1年次に在籍する女子大学生を対象とした2009年度と2011年度の比較調査（原，2012）によると、責任に対して前向きな人が増え、環境活動や社会意識に目覚めた人が2011年度に顕著に増えたことが示され、この変化には東日本大震災の影響が示唆されている。これらは東日本大震災が青少年の価値意識に与えた影響を断片的にとらえたものであるが、東日本大震災によって引き起こされた想定をはるかに超えた環境の変化は、青少年の生き方に影響を与えたといえるだろう。

一方、このような大きなインパクトをあたえた東日本大震災の経験や教訓も、時間の経過とともに風化する可能性を懸念する声もしばしば報道されている。しかし、風化を「被災経験による教訓が社会に定着し、人々の共通知となり、当たり前のこととして語られなくなるまでの過程」ととらえ、共通知が生活の一部にとりいれられたものを「災害文化」と解釈する立場もある（島・片田・木村，2010）。記憶から薄れていく教訓もあれば、当たり前のこととして青年の価値意識として定着していくことがらもあるといえる。

著者らは、東日本大震災による大学生の価値意識の変化を幅広くとらえ、長期的かつ定期的な測定により、青年期にある大学生が東日本大震災によって受けた影響の変化の様相を明らかにすることを震災直後からの一連の研究の目的としてきた。その着想の背景には、この東日本大震災から得るべき一般的教訓は、将来おこりうる災害に備えることはもとより、情報化技術・科学技術が高度に発展した現代社会において、当たり前享受到してきた便利な生活への感謝、自然との共生・共存の意味を考えることにあったと考えたことにある。また、超少子高齢社会に向かう中で地域や人とのつながり、社会制度がどうあるべきか、そしていかによく生きるかなどといった課題に改めて向き合うこととなった。これらは、大学での自然科学、社会科学、人文科学、いずれの領域の学びにも通じるといえる。こうした観点から考えると、これからの日本社会を構築していくことが期待される青年たちに、東日本大震災の経験がどのように定着したかを把握することは必要であり、そのデータから、今後の大学教育において取り組むべき課題を明確にできるといえる。

東日本大震災後の価値意識については、時間の経過とともに変化していくという時間軸によるアプローチのほかにも、地域によって異なる可能性が指摘できる。たとえば、青年を対象に東日本大震災後の心理的反応について地域差を検討した蛭原・久田（2016）によれば、福島県と東京都・神奈川県出身者では、「価値観・人生観の肯定的な変化」「地元愛」「家族・周囲の人々への感謝」などの測定した全ての側面において、福島県出身の方が高く評価したことを報告

している。また、齋藤・岡本・則定・松木（2016）は、地震、津波に加えて放射線被害という多重の被害を受けた福島県とそれ以外の地域の大学生を比較し、外傷後成長の様相が、福島県か否かで異なることを示した。これらは、被害が大きい地域の方が、反応が大きい・敏感であるという一般に想像されやすい結果を反映したものであるが、一方で、自然災害に対する反応は、非被災地の人の方が大きいという研究結果もある。たとえば2008年の四川大地震が被災地および被災地外の人々に与えた影響について、被災地の住民はその被害状況の見積もりが、非被災地の人に比べて甘い（つまり、地震後の安全性に関する懸念が低い）ことを見だし、Psychological Typhoon Eye 効果（e.g., Li et al., 2009, 2011）として報告している。直訳すれば「心理的台風の目」効果である。台風の目（中心部）は、暴風雨が吹き荒れる周りに比べて静かであることにたとえたものであるが、そのような地域差が認められる理由を、心理的免疫効果や認知的不協和理論により説明している。こうした被災地からの地理的距離による反応の違いは、防災・減災意識や災害復興への関心・関与の違いを生む可能性が高い。したがって、今後の災害への向き合い方を決めていく大学生世代の東日本大震災後の価値意識を、全国的にとらえることにも一定の意義があると考えた。

このような全国の大学生の価値意識を長期的に把握し続けるためには、長期的に活用可能であり、かつ、簡便な計測手法が必要となる。1995年1月の阪神・淡路大震災³に関連しても、心理的影響やボランティア活動参加など災害に対する人々の反応をとらえる試みが多数なされている。たとえば日下・中村・山田・乾原（1997）は、阪神・淡路大震災6か月後の被災者の心理的症状と関連要因を検討する中で、災害観（天譴論、自然の仕返し、自然現象、運命論）や、人生観（日常感、無常感、享楽感）の変化を測定している。この人生観を問う質問項目群は、阪神・淡路大震災の体験記をもとに作成されたものであった。ただし、東日本大震災は津波、原子力災害を含むため、阪神・淡路大震災とは被災状況が大きく異なることから、日下らの研究ではとらえられていない側面が存在する可能性が考えられる。そこで、著者らはまず、2011年7月～8月に東日本大震災後の生活意識に関する自由記述調査を全国で行うことにした（木野・大橋・松浦，2012a; 大橋・木野・松浦，2012）。この調査結果の分析に基づき、東日本大震災後の価値意識の変化を地域差も考慮しながら長期的に測定していくための40項目を試作し、宮城県内の大学生を対象に予備調査を実施した（木野・大橋・松浦，2012b）。これらの予備的研究を踏まえた上で、東日本大震災後の大学生の価値意識を測定するための質問項目群を確定した。

また、東日本大震災の影響が大学生時代に精神的な健康を損なうという形で顕在化する可能性も考えねばならない。蟻塚（2014）による症例報告に見られるような晩発性PTSDなど、出来事の経験直後に現れるとは限らない精神症状や適応の問題が、時間経過に伴って生じる可

³ 気象庁の定めた名称は「1995年兵庫県南部地震」である。

能性も指摘できる。東日本大震災についていえば、幼少期の経験が青年期になって重要な意味を持つ可能性も考えられるのである。東日本大震災後の精神的な健康状態についてもその変化を把握することを目的として、本研究では、PTSD 診断尺度 (林, 1995) の一部を参考に、精神的な健康度を把握するための質問項目も設定することとした。

本論文では、以上を踏まえて考案した、東日本大震災後の大学生の価値意識と心理的健康状態をとらえるための質問項目群を紹介するとともに、定期的調査を開始した2013年1月の初回調査について、全体的な回答傾向の検討と地域間比較を行うこととする。なお、地域間比較を行うにあたっては、主として被災地からの地理的距離を考慮することとした⁴。各都道府県を被災3県との近接度と地方区分を考慮して6エリアに分け (Figure 1 参照)、被災地からの地理的距離の指標とした。

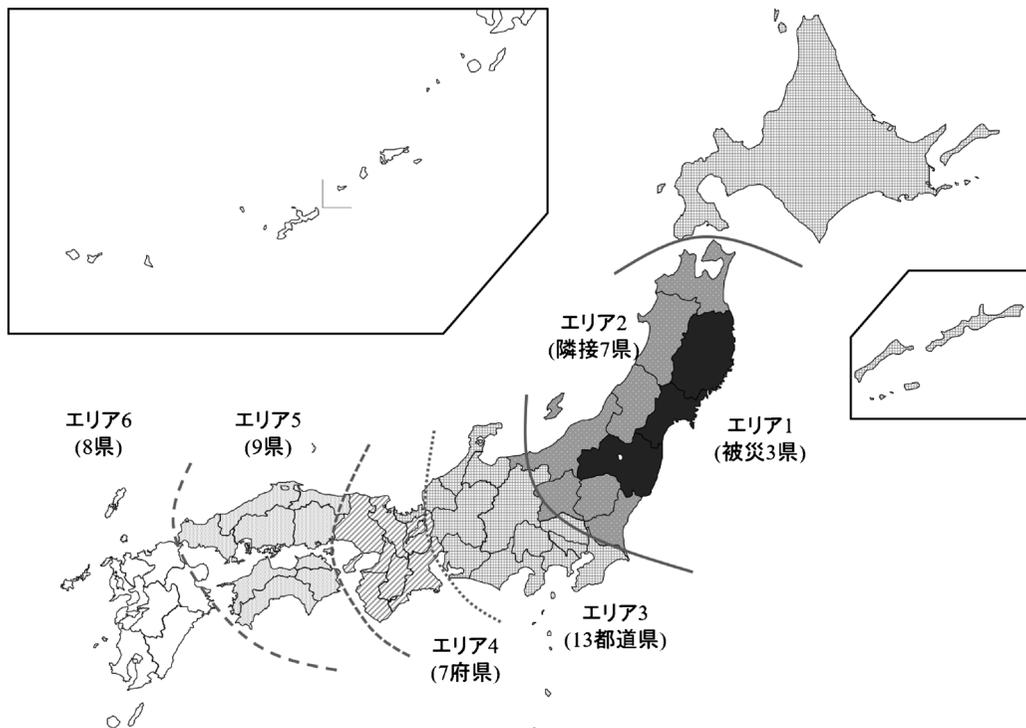


Figure 1 被災地からの地理的距離6区分 (大橋他, 2012より)

⁴ 当初、調査対象者本人や近親者の被災経験などに基づいた“心理的距離”の測定も検討したが、東日本大震災で本人や近親者・友人等が受けた被害を一斉調査において問うことについては、調査が心理的な外傷を与えかねないという倫理的問題が懸念される。したがって本研究では、外形的な情報である出身地や大学所在地のみをたずねることにとどめた。

2. 方法

(1) 調査対象者および手続き⁵

24 都道府県に所在する 34 大学から計 1,992 名分の回答を得た。調査対象者の内訳を Table 1 に示す。調査用紙は、各大学で個別あるいは授業時間中に集団に対して配布され、その場で回答を求めて回収した。調査は匿名で行い、調査への協力は任意であることを強調した。また、調査の途中で中断することも可能である旨を伝えた上で、それらに合意した者を調査対象者とした。実施時期は 2013 年 1 月中旬～2 月上旬であった。

分析に際しては、このうち 18～25 歳の者を対象とした (1,879 名、94.3%)。また、被災地からの地理的距離を考慮するために、分析対象は大学所在地のエリアと出身地のエリアが同じである者のみに限定した。さらに、エリアごとの回答者数を均一にするために、6 エリアごとに男女 40 名ずつを抽出した計 480 名分を扱うこととした (年齢平均=19.93, $SD=1.20$)。

(2) 調査内容

①大学生の価値意識：本研究に先立って実施した自由記述調査 (木野他, 2012a; 大橋他, 2012) および予備調査 (木野他, 2012b) に基づき、震災観 (5 項目)、対人・社会観 (5 項目)、地域観 (4 項目)、安全観 (5 項目)、自然観 (5 項目)、人生観 (5 項目)、死生観 (5 項目)、生活観 (8 項目) の 8 カテゴリについて、計 42 項目を作成した (Table 2 参照)。各項目は敢えて抽

Table 1 大学所在地のエリアおよび性別の回答者数(人)

大学所在地	性別			計	割合
	男	女	未回答		
エリア1 (被災3県)	53	155	3	211	10.6%
エリア2 (隣接7県)	153	257	21	431	21.6%
エリア3	161	475	16	652	32.7%
エリア4	86	118	8	212	10.6%
エリア5	102	102	8	212	10.6%
エリア6	110	154	10	274	13.8%
計	665	1261	66	1992	

⁵ 本データは、日本心理学会第77回大会 (2013年開催) における研究発表 (木野・大橋・松浦, 2013) で用いたものである。ただし、学会発表のデータは、5段階評定の回答に1-5ではなく、0-4の5段階の数値を割り当てたものであった。

象度の高い表現を用い、また各カテゴリ内で項目内容に多様性を持たせた。ただし、生活観の8項目のうち、3項目は日常的な生活実感をたずねるために具体性の高い(=抽象度の低い)内容とした。木野他(2012b)では生活観を測定する項目は6項目用意していたが、項目間の関連を考慮して1項目を削除し⁶、新たに抽象度の低い項目を3項目追加した。回答は全て、1=全く当てはまらない、2=あまり当てはまらない、3=どちらとも言えない、4=やや当てはまる、5=とても当てはまる、の5段階評定により求めた。

なお、「震災観」は、東日本大震災の経験が個人の生き方や社会のあり方に与えた影響力に対する考え・態度を問う項目から構成されている。高得点ほど、経験・影響力を高く評価していることを意味する。「対人・社会観」は、他者との助け合いおよび社会の平等性に対する期待の低さを問うものである。得点が高いほど、期待が低いことを意味する(ただし、1項目は逆転項目)。「地域観」は、地元への愛着を肯定する態度を問うものである。高得点ほど、肯定的態度であることを意味する。「安全観」は自身の安全を確保することに対する意識の高さを問うものである。高得点ほど、意識が高いことを意味する。「自然観」は自然の恵に感謝し、自然を敬い大切にすることを反映するものである。高得点ほど、大切にすることを意味する(ただし、1項目は逆転項目)。「人生観」は生きることに真摯に向き合い、計画性と柔軟性をもってよりよく生きていこうとする態度を問う項目からなる。高得点ほど、人生と向き合う態度が強いことを意味する。「死生観」は生きることと死ぬことについての考え方で、主に、命の儚さと観念的な存在としての死者を肯定する態度を問う項目からなる。「生活観」は、平穏な日常生活を送ることができることのありがたさおよび生活に必要なものについて慎重に検討する姿勢を肯定する態度を問う項目からなる。「死生観」「生活観」ともに、高得点ほど、肯定的態度であることを意味する。

②精神的不健康: PTSD診断尺度(林, 1995)における3下位側面のうち、「再体験」を除いた「回避」と「生理的過緊張」について、2項目ずつを用いた。原典にしたがい、過去1か月間にこのような体験が続いたかの状態をたずねたが、回答は「はい」「いいえ」の2件法ではなく、上記①と同様の5件法で求めた。また、「生理的過緊張」に関する項目「ものごとに敏感になって、眠気も起きない」については、「ものごとに過敏になって、眠気も全く起きない」と表現を改めた。なお、これらは、「当てはまらない」方向の回答を前提としている。仮に、ある年に、「当てはまる」人が増えたならば、何らかの全体的な介入が必要なサインである可能性が考えられる。

③個人属性: 出身都道府県、年齢、性別をたずねた。また、回答は、実施大学ごとに回収し、大学所在地もデータとして取り扱った。

⁶ 削除項目は「安定した生活は、かなりの努力をしないと得られないものだと思う」であった。

3. 結果と考察

(1) 項目の記述統計

各項目に対する評定値の代表値と散布度を Table 2 に示す。「震災観」「死生観」については 5 項目中 4 項目で天井効果が見られた。2013 年の段階では、全国的に、東日本大震災が個人の生き方や社会のあり方に強い影響を与えるものであり、この経験の教訓を重要視する意識、また、死を身近なものにとらえ、死者を忘れぬ気持ちを肯定する意識が強かったのではないかと考えられる。

なお、「震災観」の項目に対して全体に「当てはまる」方向に回答する傾向にあったことについては、社会的望ましさの影響も考えられる。しかし、仮にそうであったとしても、「そう答えるべき」という意識の表れにとらえれば、それはある種の価値意識の反映にとらえることができるのではないだろうか。

(2) 下位尺度得点の算出

各下位尺度得点は、逆転項目の得点処理を行った上で、想定された項目への評定値の合計を構成項目数で除算することにより求めた。想定された下位尺度構成に従い、 α 係数を算出したところ、「震災観」で .70、「地域観」で .66 であった。「人生観」では .57 であったが、「高望みをせず、無理のない生き方をしたいと思う」を除くと .70 となったため、この項目を除いて尺度得点を求めることとした。また、「精神的不健康」で .66 であった。これらの 4 側面の下位尺度得点の平均と標準偏差を Table 3 に示す。

これら以外の側面については、「対人・社会観」.51、「生活観」.58、「安全観」.35、「自然観」.45、「死生観」.54 と、十分な信頼性が確認されなかった。カテゴリ内の項目の多様性を重視した結果と考えられる。したがって、現段階では尺度として扱うよりも項目レベルで資料として記載するにとどめる。

(3) 下位尺度得点間の相関

東日本大震災の影響力の強さに対する意識（「震災観」）と他の価値意識、およびこれらと精神的不健康との関連を検討するために、下位尺度得点間の相関係数を算出した (Table 3 参照)。「震災観」「地域観」「人生観」の価値意識間には .35~.36 の相関が見られた。東日本大震災の影響の大きさを認め、教訓を活かそうという意識が高いほど、計画性と柔軟性のある人生を真剣に考えようとする意識や地元地域社会を大切に考えることを肯定する傾向が高いことが示された。「震災観」は東日本大震災に影響を受けたことを直接に反映しやすい価値意識の側面と考えられるが、今回の相関係数のみから、東日本大震災の経験が「人生観」「地域観」に影

Table 2 全調査項目の代表値、散布度

No.	項目	M (SD)	歪度	尖度	天井/床効果
■東日本大震災についてのあなたの考えをお聞きます。					
震災観	2. 日本は、東日本大震災で学んだ教訓を、決して忘れてはならない	4.58 (0.66)	-1.67	3.20	△
	5. 東日本大震災は未曾有の災害なのだから、社会はこの経験のすべてを活かすべきだ	4.37 (0.75)	-.98	.50	△
	1. 東日本大震災と同じような自然災害が、自分が生きている間に、必ずまた起こると思う	4.22 (0.83)	-.81	.04	△
	3. 東日本大震災は、世界を大きく一変させるような出来事だったと思う	4.14 (0.95)	-1.05	.63	△
4. 東日本大震災は、自分の人生に多大な影響を与えた	3.37 (1.17)	-.30	-.77		
■地域社会や人間関係についてのあなたの考えをお聞きます。					
対人・社会観	1. 人は、誰かと互いに支え合って生きていくものだと思う	4.56 (0.68)	-1.76	3.62	△
	5. 人の示す関心など、ささいなきっかけで薄れてしまうものだ	3.58 (0.97)	-.47	-.18	
	7. すべての人が等しく幸せを感じられる社会など、実現できないと思う	3.55 (1.09)	-.39	-.59	
	3. 決断が必要な時には、少数意見が無視されることがあってもやむを得ない	3.26 (0.99)	-.26	-.55	
4. いざというときでも、知らない人同士だとなかなか助け合えないと思う	2.73 (1.13)	.30	-.89		
地域観	8. 地元の産品が広まっていくことは、誇らしいことだ	4.29 (0.82)	-1.26	1.78	△
	9. 自分の生まれ育った土地には、特別な愛着を抱くものだ	4.17 (0.96)	-1.28	1.49	△
	2. 地域の祭りや行事に参加することで、その地域を盛り上げていくことは大切だと思う	4.06 (0.87)	-1.03	1.33	
6. 郷土の歴史に特別な関心がある	2.55 (1.13)	.39	-.65		
■科学と自然についてのあなたの考えをお聞きます。					
安全観	7. 万が一の事態に備えて、普段から準備をしておくことはとても重要だ	4.37 (0.66)	-1.09	2.54	△
	5. 危険性についての本当の情報はなかなか公表されないものだと思う	4.12 (0.84)	-.78	.33	
	4. 安全については、他人任せにせず、できるだけ自分で確認したい	3.97 (0.86)	-.91	1.03	
	1. 少しでも危険があるものは、社会から排除すべきだと強く思う	2.93 (1.05)	.00	-.52	
2. 自分や身近な人の安全のためならば、その他のことは犠牲にしてもよい	2.70 (1.02)	.14	-.49		
自然観	3. 自然現象を人間が制御することなど、絶対にできないと思う	3.98 (1.05)	-.89	.10	△
	6. いまは多少不便でも、子々孫々のために自然を破壊すべきでない	3.96 (0.96)	-1.06	1.09	
	8. 自然は脅威よりも、さまざま恵みを人間に与えてくれると思う	3.95 (0.80)	-.42	-.01	
	10. 自然は最大の敬意をもって接するべき存在である	3.92 (0.90)	-.53	-.12	
9. 種の絶滅も自然の営みの一部であり、特に問題にすべきことではないと思う	2.72 (1.09)	.27	-.66		

(次ページに続く)

(前ページからのつづき)

No.	項目	M	(SD)	歪度	尖度	天井/床効果
■生きることや死ぬことについてのあなたの考えをお聞きます。						
人生観	1. その時々状況に柔軟に対応しながら生きていきたいと思う	4.34	(0.71)	-1.39	3.92	△
	9. 生きることを意味を見出せるように一生を過ごしたい	3.94	(0.95)	-.85	.61	
	3. 先々のことを見越して計画的に生きていきたいと思う	3.84	(0.94)	-.69	.21	
	8. 高望みをせず、無理のない生き方をしたいと思う	3.73	(1.04)	-.71	.02	
	4. いか生きるかを真剣に考えながら人生を送るべきだ	3.69	(0.98)	-.57	-.01	
死生観	2. 人は死んでも、誰かの思いの中に生き続けるものである	4.12	(0.96)	-1.09	.81	△
	6. 人はいつ死んでもおかしくないような儚い(はかない)存在なのだと強く思う	4.06	(0.98)	-.91	.19	△
	10. 死はとても身近なものである	4.05	(0.99)	-.88	.13	△
	7. 与えられた命をきちんと生きることが使命だと感じる	3.95	(1.05)	-.99	.56	△
	5. 天国や地獄など、死後の世界の存在を強く信じる	2.78	(1.23)	.18	-.89	
■生活の仕方についてのあなたの考えをお聞きます。						
生活観	1. 普通の生活で感じる“普通の幸せ”を大切にしながら毎日を過ごしたい	4.39	(0.73)	-1.14	1.37	△
	5. 家族や友人たちとともに過ごす日常が、なによりも大切だと思う	4.24	(0.87)	-1.23	1.49	△
	8. 高度な知識よりも、日々の暮らしに活かせる知恵の方が大切だと思う	3.92	(0.89)	-.56	-.03	
	3. 日々の生活に本当に必要であるかどうかを考えて消費すべきだと思う	3.75	(0.90)	-.66	.28	
	7. 多少不便になったとしても、地球や社会のことを優先に考えて生活すべきだ	3.35	(0.90)	-.23	-.23	
抽象度目の低い	6. マーケット・コンビニに日用品があることを、とてもありがたいと思う	4.29	(0.82)	-1.30	1.99	△
	2. 自分の故郷を離れても、災害が少ない地域で生活したい	3.47	(1.14)	-.24	-.81	
	4. 食事は一口一口をしっかりと噛みしめ味わうようにしている	2.90	(1.05)	.17	-.68	
■この1ヶ月間に、あなたは次のような体験が続きましたか。						
精神的不健康	3. ほかに人といても、その人との距離が遠く感じられる(a)	2.76	(1.22)	.08	-1.03	
	4. 先のこと、将来のことを考える気になれない(a)	2.55	(1.23)	.36	-.88	
	2. わずかなことにもひどく驚く(b)	2.00	(1.11)	1.06	.35	▽
	1. ものごとに敏感になって、眠気も全く起きない(b)	1.80	(1.04)	1.28	.92	▽

注1) カテゴリの提示順序：①地域社会や人間関係、②生活の仕方、③科学と自然、④生きることや死ぬこと、⑤1か月間の体験、⑥東日本大震災
 注2) 項目No.の下線は、各側面内の他の項目とは逆の意味が想定される項目の意
 注3) 「精神的不健康」の項目後のアルファベットは(a)が「回避」、(b)が「生理的過緊張」を示す
 注4) N=480(各エリアについて、男女40名ずつ)
 注5) 全項目について、理論上の最小値=1、最大値=5。△=天井効果、▽=床効果

Table 3 尺度得点の平均(SD)および尺度間相関

	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	α	項目数	地域観	人生観	精神的 不健康
震災観	4.13	(0.60)	.70	5	.36***	.35***	-.08
地域観	3.77	(0.67)	.66	4		.36***	-.03
人生観	3.95	(0.65)	.70	4※			-.10*
精神的 不健康	2.28	(0.81)	.66	4			

注1) $N=480$

注2) ※「高望みをせず、無理のない生き方をしたいと思う」を除く4項目で構成

注3) *** $p<.001$, * $p<.05$

響したと結論づけることはできない。「人生観」「地域観」を肯定するからこそ、東日本大震災の影響も重要視する傾向があるとも考えられる。こうした因果関係を明らかにするためには、各個人の東日本大震災前後の価値意識を縦断的にとらえる必要があるが、それは困難である。本研究の限界といえよう。

なお、「精神的な不健康」については、いずれの価値意識ともほぼ無相関であった。これらの価値意識が高くても、精神的に必ずしも不健康というわけではなく、健康な場合も不健康な場合もあることがわかった。今回の調査対象者においては、精神的健康を左右する他の要因の存在が考えられる。また、後述のように、本研究の調査対象者は、大学の授業に出席し、本調査に完答できる程度には健康であったため、明確な関連が見られなかった可能性がある。

(4) 価値意識の比較

回答者の出身エリアおよび性別により価値意識が異なるかどうかを検討するために、エリア(6)×性別(2)の分散分析を各下位尺度について行った(Table 4)。「震災観」については、性別の主効果($F(1,468)=12.32, p<.001$; 女>男)およびエリア×性別の交互作用($F(5,468)=3.98, p<.01$)が有意であった。下位検定の結果、エリア1およびエリア5において、女性の得点が男性の得点に比べて有意に高かった($p<.001$)。また、男性でのみエリアの効果が有意であり($p<.01$)、エリア1の男性の得点は、エリア2・エリア3・エリア6の男性の得点より低い傾向が見られた($p<.10$)。

「地域観」については、エリアの主効果が見られた($F(5,468)=4.06, p<.01$)。下位検定の結果、エリア1およびエリア2の得点はエリア6の得点よりも有意に低かった($p<.05$)。また、性別の主効果が見られ($F(1,468)=7.63, p<.01$)、男性に比べて女性の方が高得点であった。

「人生観」については、エリアの主効果が見られた($F(5,468)=3.05, p<.05$)。下位検定の結果、エリア1の得点はエリア4およびエリア6の得点よりも有意に低かった($p<.05$)。また、性別の主効果が見られ($F(1,468)=8.35, p<.01$)、男性に比べて女性の方が高得点であった。

Table 4 エリア別・性別の尺度得点の平均(SD)

		エリア1 (被災3県)	エリア2 (隣接7県)	エリア3	エリア4	エリア5	エリア6	エリアの 主効果	性別の 主効果	交互作用
震災観	男	3.81 (0.75)	4.19 (0.62)	4.20 (0.63)	4.00 (0.55)	3.87 (0.68)	4.19 (0.53)		$F(1, 468) = 12.32$	$F(5, 468) = 3.98$
	女	4.33 (0.56)	4.15 (0.55)	4.29 (0.50)	4.24 (0.53)	4.32 (0.49)	4.06 (0.59)	<i>n. s.</i>	$p < .001$	$p < .01$
地域観	男	3.41 (0.75)	3.64 (0.84)	3.66 (0.64)	3.64 (0.69)	3.71 (0.60)	4.06 (0.57)	$F(5, 468) = 4.06$	$F(1, 468) = 7.63$	
	女	3.76 (0.75)	3.65 (0.78)	3.98 (0.63)	3.87 (0.54)	3.92 (0.44)	3.94 (0.48)	$p < .01$	$p < .01$	<i>n. s.</i>
人生観	男	3.56 (0.73)	4.03 (0.69)	3.99 (0.65)	3.93 (0.56)	3.69 (0.66)	4.01 (0.60)	$F(5, 468) = 3.05$	$F(1, 468) = 8.35$	
	女	3.98 (0.78)	3.96 (0.63)	3.99 (0.62)	4.19 (0.62)	3.97 (0.46)	4.13 (0.61)	$p < .05$	$p < .01$	<i>n. s.</i>
精神的 不健康	男	2.23 (0.84)	2.25 (0.92)	2.23 (0.95)	2.10 (0.76)	2.51 (0.81)	2.29 (0.85)			
	女	2.29 (0.88)	2.35 (0.90)	2.26 (0.64)	2.38 (0.71)	2.29 (0.71)	2.16 (0.70)	<i>n. s.</i>	<i>n. s.</i>	<i>n. s.</i>

注1) $N=480$ (各エリアについて、男女40名ずつ)

注2) 上段は平均値、下段は標準偏差

以上から、「地域観」「人生観」において、エリアによる差異が認められ、いずれの価値意識にも共通して、被災3県が最遠のエリア6に比べて得点が低いことが示された。被災地域の住民よりも離れた地域の大学生の方が、地元への愛着を肯定し、生きることに真摯に向き合う態度を有するという結果は、Psychological Typhoon Eye 効果に似た傾向といえよう。ただし、本研究で検討した「地域観」「人生観」は、先行研究で扱われたような被災地の状況に対する悲観的な見方を問うものではないため、心理的免疫効果や認知的不協和理論による説明をそのまま適用することは難しい。本研究の場合、被災地域から離れているほど、現状を俯瞰的に見ることができ、距離をおいて客観的に意味づけることができているということではないだろうか。

「震災観」においては、男性においてのみ、エリアによる違いが見られ、被災3県の男子大学生は他地域の男子大学生よりも評定平均が低かった。一方、同じ被災3県における比較でも男子大学生は女子大学生よりも東日本大震災の影響が小さかった。これらを考えると、「震災観」の評価は被災地における性差が他地域よりも非常に大きいといえる。この差が、男女によって影響の受け方が異なるのか、あるいは、単に顕在化の様相やタイミングが異なるだけなのか、あるいはこれらの両方なのかは、本研究では明確にできなかった。しかし、今後も継続して調査を続けることによって、このような影響を与えた心理メカニズムが明らかになってくるのかもしれない。

なお、「精神的不健康」については、有意な効果が見られなかった。全体に尺度得点の平均値も低めであり、「当てはまらない」という方向の回答であった。調査方法を踏まえて考えると、大学の授業に出席し、本調査に完答することができる程度の健康状態の大学生たちには、本研究で設定した程度の精神的な不健康状態は自覚されないということなのかもしれない。そもそ

も「精神的不健康」の項目については、「当てはまらない」という方向の回答が期待されるものである。そして晩発性 PTSD の可能性を考え、長期的に大学生の状態を見守ることを目的に、定期的調査を継続的に行うにあたり取り入れたものである。今後、仮に不健康な方向への変化が見られたとしても、東日本大震災からの時間が経過するほど、その理由を正確に特定することは難しくなる。しかし、今後も定期的な測定を続け、集団としての不調の傾向が見られないか、もし見られた場合は日本全国で低下するのか、それとも特定の地域だけで低下するのかを比較検討すること、また、変化が生じた時期の社会背景を重ねて読み解くことで、東日本大震災が大学生の精神的健康に及ぼす遅延効果についていくらかの示唆が得られるであろう。さらにいえば、大学生時点では不健康な様相が現れなくても、その後、不調に転ずる可能性もあることというまでもないことである。

最後に全般的な性差について述べる。本研究では、精神的不健康以外の価値意識について性差が見られ、男性よりも女性の方が高得点であった。阪神・淡路大震災の半年後に地域住民に調査を行った日下他(1997)の結果では、PTSDの再体験以外では性差が見られないこと、また、人生観(日常感・無常感・享楽感)の変化において、男性より女性の方が高く評価していることが示されている。そして回答女性の8割以上が無職で、家庭が主な生活基盤であったこと、その生活基盤が大きく揺るがされたことが、その背景にあると考察している。本研究の結果は、日下らの結果とほぼ対応すると考えられるが、全国の大学生を対象とするものであるため、同様の説明をすることには困難がある。今後、より一般的な説明のための研究が必要であろう。

(5) 因子分析による検討

本研究では大学生の価値意識の測定に際して、抽象度の高い項目を用意した。このため、時間の経過とともに項目のとらえ方が変容する可能性が考えられた。そこで本研究では、補足的に、2013年時点での全国の男女回答者の価値意識項目の意味づけの様相を検討した結果を報告し、今後の参考資料とする。分析に際して、今後の定期的調査結果と比較できるように、今回は、各項目の分布を考慮せず、抽象的な価値意識項目すべて(すなわち、生活観の抽象度の低い3項目を除いた価値意識39項目)について、因子分析(主因子法)を行った。固有値の減衰状況とそれに基づくプロマックス回転解の因子負荷量の解釈可能性から、最終的に8因子解を採用した。因子負荷量が.30以上であることを基準に項目検討を行った(Table 5)。

第1因子は「人生観」に関する項目の負荷が高かった。「死生観」に関する1項目(命を全うすることの肯定感)も第1因子への負荷が高く、これらは真摯に生きる姿勢にかかわる内容であったため「人生観」と命名することができるだろう(以降、これらの項目で尺度得点を算出した場合の α 係数を参考値として併記する。「人生観」尺度においては $\alpha=.75$)。

Table 5 因子分析結果（主因子法・プロマックス回転後）

No.	項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8
④-4	人生観：いかに生きるかを真剣に考えながら人生を送るべきだ	.928	.021	-.161	.029	-.027	-.035	-.014	-.058
④-9	人生観：生きることの意味を見出せるように一生を過ごしたい	.635	.001	.009	.086	.152	-.070	.024	-.110
④-7	死生観：与えられた命をきちんと生きることが使命だと感じる	.492	.003	.168	.071	.002	.121	.055	-.049
④-3	人生観：先々のことを見越して計画的に生きていきたいと思う	.475	-.040	-.032	-.113	.153	-.041	-.128	.151
④-2	死生観：人は死んでも、誰かの思いの中に生き続けるものである	.299	.003	.209	-.054	.205	.116	-.001	-.030
④-5	死生観：天国や地獄など、死後の世界の存在を強く信じる	.297	.020	.136	.051	-.144	.215	.127	-.042
④-10	死生観：死はとても身近なものである	.020	.658	-.058	-.112	-.108	.062	-.100	.153
④-6	死生観：人はいつ死んでもおかしくないような儚い（はかない）存在なのだと思う	.066	.529	-.022	-.066	-.017	-.083	-.102	.020
⑥-1	震災観：東日本大震災と同じような自然災害が、自分が生きている間に、必ずまた起こると思う	.009	.412	.211	-.006	.080	-.079	-.011	-.201
③-10	自然観：自然は最大の敬意をもって接するべき存在である	.042	.344	.085	.172	.018	.082	-.055	.028
③-3	自然観：自然現象を人間が制御することなど、絶対にできないと思う	-.068	.328	.009	-.015	.006	-.098	.041	.122
③-5	安全観：危険性についての本当の情報はなかなか公表されないものだと思う	-.041	.371	.008	.080	-.003	-.328	.062	.126
⑥-2	震災観：日本は、東日本大震災で学んだ教訓を、決して忘れてはならない	-.145	.036	.784	-.062	.160	-.046	-.123	-.090
⑥-3	震災観：東日本大震災は、世界を大きく一変させるような出来事だったと思う	-.023	-.037	.736	.011	-.038	.043	.076	-.103
⑥-5	震災観：東日本大震災は未曾有の災害なのだから、社会はこの経験のすべてを活かすべきだ	.016	.134	.676	.014	.014	-.081	.015	-.014
⑥-4	震災観：東日本大震災は、自分の人生に多大な影響を与えた	.067	-.041	.502	-.038	-.173	.195	.064	.157
①-8	地域観：地元の産品が広まっていくことは、誇らしいことだ	.020	-.009	-.031	.758	.025	-.195	-.081	.022
①-9	地域観：自分の生まれ育った土地には、特別な愛着を抱くものだ	.056	-.137	-.030	.657	.124	-.079	.128	-.077
①-6	地域観：郷土の歴史に特別な関心がある	-.006	.011	.012	.507	-.194	.027	.057	.037
①-2	地域観：地域の祭りや行事に参加することで、その地域を盛り上げていくことは大切だと思う	-.090	-.088	-.088	.413	.293	.219	-.057	.132
③-6	自然観：いまは多少不便でも、子々孫々のために自然を破壊すべきでない	.062	.145	.039	.337	-.074	.105	-.199	.062
④-1	人生観：その時々状況に柔軟に対応しながら生きていきたいと思う	.114	.140	-.061	-.211	.707	-.153	.014	.074
①-1	対人・社会観：人は、誰かと互いに支え合って生きていくものだと思う	.054	-.159	-.043	.121	.539	.176	-.066	-.044
②-1	生活観：普段の生活で感じる“普通の幸せ”を大切にしながら毎日を過ごしたい	.020	-.041	.122	.024	.507	-.161	.106	.116
②-5	生活観：家族や友人たちとともに過ごす日常が、なによりも大切だと思う	.039	-.099	.032	.015	.438	.191	.003	.196
③-8	自然観：自然は脅威よりも、さまざま恵みを人間に与えてくれると思う	-.059	.258	-.029	.179	.264	.078	.130	-.033
①-7	対人・社会観：すべての人が等しく幸せを感じられる社会など、実現できないと思う	.035	.125	-.063	.125	-.022	-.638	.057	-.069
①-5	対人・社会観：人の示す関心など、ささいなきっかけで薄れてしまうものだ	-.005	.177	.020	.036	.007	-.528	.050	-.016
①-4	対人・社会観：いざというときでも、知らない人同士だとなかなか助け合えないと思う	-.008	-.120	-.007	-.102	-.073	-.361	.108	.224
①-3	対人・社会観：決断が必要な時には、少数意見が無視されることがあってもやむを得ない	.003	-.024	.034	.001	.174	-.307	.265	-.019
②-7	生活観：多少不便になったとしても、地球や社会のことを優先に考えて生活すべきだ	-.070	.180	-.006	.157	.052	.277	.059	.239
③-2	安全観：自分や身近な人の安全のためならば、その他のことは犠牲にしてもよい	-.053	-.110	.029	.130	-.057	-.210	.535	.014
③-9	自然観：種の絶滅も自然の営みの一部であり、特に問題にすべきことではないと思う	-.008	.172	-.165	-.266	.107	.034	.308	-.018
③-1	安全観：少しでも危険があるものは、社会から排除すべきだと強く思う	.066	-.169	.096	-.031	.010	-.001	.486	.300
②-8	生活観：高度な知識よりも、日々の暮らしに活かせる知恵の方が大切だと思う	-.071	.273	-.030	.019	.106	.133	.281	.162
②-3	生活観：日々の生活に本当に必要であるかどうかを考えて消費すべきだと思う	.141	.049	-.082	-.018	.145	.007	-.037	.462
③-4	安全観：安全については、他人任せにせず、できるだけ自分で確認したい	.123	.251	.004	.106	-.124	-.172	.078	.364
④-8	人生観：高望みをせず、無理のない生き方をしたいと思う	-.164	.090	-.074	.006	.100	.047	.091	.294
③-7	安全観：万が一の事態に備えて、普段から準備しておくことはとても重要だ	.023	.057	.224	.065	.205	-.073	-.165	.273
	因子間相関	F1	.259	.514	.524	.464	.310	-.063	.478
		F2		.480	.324	.437	.016	-.057	.219
		F3			.567	.488	.320	-.027	.456
		F4				.550	.509	.016	.405
		F5					.250	-.151	.303
		F6						.162	.232
		F7							-.083

第2因子は「死生観」を想定して作成した項目のうち死に焦点のある2項目の負荷が高く、また「震災観」に関する1項目、「自然観」に関する2項目も負荷した。生物としての人間の命を含めた「自然現象の制御不可能性の認識」に関する因子と考えられる ($\alpha=.59$)。

第3因子は「震災観」に関する4項目の負荷が高かった。また、第4因子は「地域観」に関する4項目の負荷が高かった。「自然観」のうち子孫のための自然保護を意識した項目も負荷しているが、これも地元への愛着を示すものとみなすことができるだろう。これらは、ほぼ当初の想定通りといえよう (順に、 $\alpha=.72, \alpha=.67$)。

第5因子には、「生活観」「対人・社会観」「人生観」に関する項目が高く負荷していた。これらは、人間関係を大切にしながら、日々を大切に生きていこうとするものであり「穏やかな幸福追求」と考えられた ($\alpha=.66$)。

第6因子については、「対人・社会観」に関する4項目のみが負荷していた。第7因子は、「安全観」「自然観」を想定した1項目ずつが含まれており、これらは身近な安全を重要視する態度と考えられた。第8因子は「生活観」「安全観」を想定した1項目ずつが負荷しており、平穏な生活のために自分で積極的に考える姿勢に関する内容であった。なお、これらの信頼性係数は順に $\alpha=.49, .12, .39$ と著しく低かった。

因子分析によって、概ね当初想定した価値意識に対応した因子が見いだされたのは「人生観」「震災観」「地域観」であり、これらは上述の「(2) 下位尺度得点の算出」で下位尺度の信頼性が確認されたものであった。これら以外については、想定した意味づけを超えた項目間の関連性を、39項目への反応傾向からよみとることができた。ただし、今後毎年定期的に調査を継続する中で、項目の意味づけが変化する可能性も考えられる。時間経過による下位尺度得点の変動とともに、因子分析の結果の変化を確認することによっても、大学生の価値意識の変化を確認していく必要がある。

(6) 本研究における限界と今後の展開

本研究は東日本大震災の経験が青年期にどのような影響を与えるかを検討することを当初の関心として開始した。すなわち、少なくとも2011年3月に経験を自覚できる一定の年齢にあった子どもが大学生になった時点を対象とする研究である。したがって、たとえば調査が平均20歳になった時点で行われると仮定すると、2011年に学齢期直前(6歳)であった子どもが20歳に達する2025年頃までが研究の一応の区切りとなる。

しかし、東日本大震災時に低年齢であればあるほど、大学生になったときに本研究で用いた質問項目群によって測定される価値意識と東日本大震災との因果関係は不明確になっていく。この点は本研究の限界であるといえるが、本研究を開始した時点から想定していたことであった。

一方で、同じ調査方法を用いて全国の大学生を対象に継続的に調査を実施することには別の意義があることも当初から考えていた目的でもあった。それは、地震に限らず様々な自然災害に見舞われることの多い我が国では、東日本大震災ほどの衝撃を与えるかどうかはともかくとして、不幸にして一定の頻度で大きな自然災害が発生することが予想されることによる。事実、東日本大震災以降も、2014年8月の広島豪雨災害や、同年9月の御岳山の噴火災害、2016年4月の熊本地震、2018年7月の西日本豪雨災害、同年9月の北海道胆振東部地震など、多数の死者を出すような災害が発生している。本研究にはこれらの自然災害の前と後を比較するためのデータが全国的にそろっていることから、これらの自然災害が大学生の価値意識に与える影響を検討することができる。北田（2015）は、1993年～2014年の間に、原子力発電に関する意識の継続調査を実施している。これは1999年の東海村燃料加工工場臨界事故や東日本大震災による福島第一原子力発電所事故前後の反応を含む計17回の調査であり、原子力事業に対する世論の変化や事故の与えた影響が変化していく様子を長期的にとらえる貴重なデータを蓄積している。本研究においても同様の継続性が最大の特長であるといえ、質問項目を適宜見直すなどしながら、今後も継続的に研究を続けたいと考えている。

4. 引用文献

- 蟻塚 亮二 (2014). 沖縄戦と心の傷——トラウマ診療の現場から——大月書店
- 浅野 晴哉 (2015). 東日本大震災被災県における中学生の命の大切さに関する態度の変化 心理臨床学研究, 33, 417-422.
- 蛸原 千晶・久田 満 (2016). 青年期における被災体験とその関連要因——東日本大震災で被災した福島県の人々を中心に—— 上智大学心理学年報, 40, 65-72.
- 原 龍一郎 (2012). 2011年度「18歳定点調査」の結果報告と分析——東日本大震災が18歳の意識と行動に生んだ時代効果—— 相模女子大学紀要. C, 社会系, 75, 1-28.
- 林 春男 (1995). 心的ダメージのメカニズムとその対応 (特別企画 大震災とこころのケア) こころの科学, 65, 25-33.
- 木野 和代・大橋 智樹・松浦 光和 (2012a). 東日本大震災が大学生の生活観・人生観に与えた影響 (1) ——被災地からの地理的距離と記述量の関連—— 日本心理学会第76回大会発表論文集, 175.
- 木野 和代・大橋 智樹・松浦 光和 (2012b). 東日本大震災が大学生の生活観・人生観に与えた影響 (2) ——継続的調査に向けた検討—— 東北心理学会第66回大会・新潟心理学会第49回大会合同大会 (発表抄録: 東北心理学研究, 62, 58, 2013年発行)
- 木野 和代・大橋 智樹・松浦 光和 (2013). 東日本大震災が大学生の生活観・人生観に与えた影響 (4) ——被災地からの地理的距離を考慮した継続調査における初回調査結果報告—— 日本心理学会第77回大会発表論文集, 80.
- 北田 淳子 (2015). 再稼働への賛否と原子力発電についての認識——2014年のINSS継続調査から—— INSS journal: Journal of the Institute of Nuclear Safety System, 22, 27-46.
- 日下 菜穂子・中村 義行・山田 典子・乾原 正 (1997). 災害後の心理的变化と対処方法——阪神・淡路大震災6か月後の調査—— 教育心理学研究, 45, 51-61.
- Li, S., Rao, L.-L., Ren X.-P., Bai, X.-W., Zheng, R., Li, J.-Z., ...Liu, H. (2009). Psychological Typhoon Eye in the 2008 Wenchuan Earthquake. *PLoS ONE*, 4 (3), e4964. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0004964>
- Li, S., Wang, Z.-J., Rao, L.-L., Zheng, R., Ren, X.-P., Li, J.-Z., ...Bai, X.-W. (2011). How long is long enough:

Public concern about the academic careers of students from areas devastated by the Wenchuan earthquake. *Psychologia: An International Journal of Psychological Sciences*, 54, 80–86.

三浦 麻子・小森 政嗣・松村 真宏・前田 和甫 (2015). 東日本大震災時のネガティブ感情反応表出——大規模データによる検討—— *心理学研究*, 86, 102–111.

大橋 智樹・木野 和代・松浦 光和 (2012). 東日本大震災が大学生の生活観・人生観に与えた影響 (3) ——被災地からの地理的距離が記述単語の出現率に与える影響—— *産業・組織心理学会第 28 回大会発表論文集*, 130–133.

齊藤 誠一・岡本 英生・則定 百合子・松木 太郎 (2016). 東日本大震災の心理的影響に関する研究 1——2 年後調査報告—— *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 10, 87–92.

島 晃一・片田 敏孝・木村 さやか (2010). 被災経験の風化と災害文化の定着過程に関する一考察 *土木計画学研究講演論文集*, 41, CD-ROM (320).

(2019 年 10 月 18 日受領、2019 年 11 月 18 日受理)

(Received October 18, 2019; Accepted November 18, 2019)

An attempt to measure the value consciousness of Japanese university students after the Great East Japan Earthquake: Results from the first data of long-term annual survey

Kazuyo KINO

Tomoki OHASHI

Mitsukazu MATSUURA

The purpose of this series of studies is to investigate changes in the value consciousness of Japanese university students after the Great East Japan Earthquake (GEJE) as a function of the geographical distance from the disaster area and the passage of time from the earthquake. In this study, we reported the results of the first annual survey, conducted from January to February 2013, to measure undergraduates' mental health and value consciousness after the GEJE. To carry out this survey, we used a questionnaire developed from our previous research. The data analysis revealed that their views about "the GEJE", "life stance", and "local community" were positively correlated each other, but there was no correlation between these views and mental health. In addition, the results showed that students living in the disaster area marked lower scores on "life stance" and "local community" than students living in areas farthest from the disaster area. Regarding the score on "the GEJE," the same tendency as those of "life stance" and "local community" was observed only in male students. We will continue this annual survey until 2025 and keep monitoring changes in the value consciousness of Japanese university students after the GEJE.